

高 曉声 会見記（1983年8月26日）

（毎日新聞編集委員） 辻 康吾

【解説】1983年8月、毎日新聞社訪中団（団長・山内大介社長）の一員として中国を訪問した私は北京での胡耀邦総書記との会見を行い、同月26日、江蘇省常州市で作家の高曉声氏と会見した。「李順大造屋」、「陳奐生上城」などの作品で農民文学者として知られる高氏はちょうど出身地の常州に帰郷中だった。常州方言、通訳の未熟などによってその会見は必ずしも意を尽したものではなかったが、高氏は中国農民の特質、とりわけ農業生産責任制導入後の農民の変化を強調したが、失敗といわれる過去の集団化については全面的否定を避けていることなどが注目される。会見後の雑談の中で高氏は「入学試験の激化で青年層の文学への関心が低くなっている」と苦笑していたが、白樺批判以後の中国文学界の動向について多くは語ろうとしなかった。（この会見の要旨は『毎日新聞』83年10月3日に掲載）

Q 経歴についてお聞かせください。

A 思いつくままに少し話してみましよう。私は常州の片田舎の人間です。私の故郷は田舎で、主に農業を営んでいましたが、父の代からは知識分子となって学校の先生をしていました。そのため、私は幼い頃からずっと農村で過ごし、高等学校を卒業するまで農村を出たことがありませんでした。大学に入って勉強して二年たつと中国が解放されました。つまり私は49年に工作に参加したことになります。参加してから、元通りに蘇南（江蘇省南部）の農村に帰って仕事をしました。このように、私はこれまで蘇南の農村から一度も離れたことがないのです。

Q 大学の時は？

A 上海にいました。経済学部です。今の華東財經学院です。解放後1年間新聞学科で学びました。無錫にある蘇南新聞学校です。

Q 創作活動の初期は？

A 1951年から創作活動を始めました。書き出してみると、その内容はほとんどが農民のことでした。当時は、詩、小説、戯曲を書きました。私と同年齢の人たちが知っている私の作品に「走

上新路」という戯曲がありますが、これは合作化を歩む農民を描いた作品でした。そのほか「解約」という短篇小説があります。婚約破棄を扱った作品です。これらは53～54年頃書いたものです。当時、江蘇のどの劇団もその戯曲を上演しました。

Q 反右派闘争の時は？

A 57～58年の反右派闘争の時には、私も右派として攻撃され、再び故郷に戻りました。それ以来私は一度も故郷を離れたことはありません。故郷では労働をしたり、先生をしたりしていました。私が右派として攻撃された原因は、ある政治的な意見を表明したからなのですが、そのころは私は年も若く、文学と政治の関係がはっきり分かっていませんでした。ある物事に対しては私自身の考えをもっていました。今振り返ってみれば、その考えの基本的な部分——社会主義を擁護し、共産党を擁護する——はやはり正しいと思います。しかし、階級闘争の欠点をあからさまに指摘するなど発表の仕方が極端で過激だったのです。

Q 文化大革命の時は？

A それから故郷に戻り、労働に参加してのち、

また教師をしました。文化大革命が始まっていて、教えていても、教えられる方は、それが真実ではないとみな分かっていたと思います。私は農村に戻って農業科学実験の仕事に従事しました。肥料や農薬、細菌を扱うのですが、例えば、〇四菌・五大菌・五四〇・六九二〇・灰黄酵素・青褐黄酵素などです。その他にも食用菌、例えば銀耳（白きくらげ）、木耳（きくらげ）、靈芝、猴頭などがあります。ただ単に農薬、農業技術指導だけをやっていては、直接農業にサービスする工場は損をしてしまいます。だから副業——菌類の副業——も少しやって、この工場経営の足しにしました。こうして農村における諸々の事柄に、より多くより広く触れることができました。仕事の範囲は一つの生産隊、一つの大隊というように限定されることはありません。文化大革命後、我が鎮江地区がキノコ栽培をやっていることでとても有名になり、キノコ栽培方法を出張講義に出かけたこともありました。

Q 創作活動の再開についてお聞かせ下さい。

A 78年6月に創作活動をまた始めました。私はすでに20年以上も創作活動をしておらず、文学界と何の接触もありませんでした。私がまた新たにこの仕事に従事できるようになったのは何故でしょうか？ その大きな理由はやはり四人組が粉碎されたからです。中央の指導的同志の何人かが話の中で毎回述べているのは、实事求是の態度をとり、大衆生活に関心を持ち、党の優れた伝統を回復させなければならないということでした。これは人の心を打つ言葉です。もちろん、これ自体は新しいことでも何でもなかったけれど、文化大革命の十年の動乱を経た後に改めて述べたわけですから、非常に胸を打つ言葉として聞いたわけですから、それは何故か？ 私が思うに、農村においてはこのようにいわねばならないような問題が確かに存在するからで



高曉声氏(左)と筆者

す。党の優れた伝統を回復し、实事求是の態度を守り、大衆の苦しみに関心を寄せなければならない——農村においてこの言葉が意味することについては、実にたくさん話すことがあります。正にこの点から出発して、私は改めて筆を執り、小説を書きはじめたのです。

Q どのように名誉回復になったのですか。

A 正式な名誉回復は79年11月でした。しかし、78年にはすでに創作を始めていました。私は62年に右派分子のレッテルをはがされていました。文化大革命中は、ごく普通の攻撃を受けました。私は専ら闘争のお相伴をつとめました。というのも、他にすることがなかったからで、私自身はたたかれました。それも68年になって初めて批判されました。それ以前は、病気にかかり、手術を受けて家にいました。

Q 四人組失脚後の最初の作品についてお聞かせ下さい。

A 「特別標記」を78年6月に書き始めました。とても速く書けて、あっという間に書き進みました。

Q 「李順大造屋」は？

A 79年2月に書きました。

Q 陳奐生シリーズは？

A “陳奐生もの”は全部で五つの小説からなります。①「漏斗戸主」（78年11月）、②「陳奐生上城」、③「陳奐生転業」、④「陳奐生包産」、⑤「書外春秋」です。

ある知り合いの農民が陳奐生は自分のことを書いたものだと思い込んで、文句をつけにやって来ました。皆が彼を陳奐生だとからかったからです。実際、皆が彼をからかったのは善意からで、悪意あってのことではありません。しかしその結果は、彼が私の所へ話をつけにやって来て、私は否定しましたが、いまでも私の話はどうも怪しいと思い込んでいるようです。

Q 小説集は？

A 毎年短篇小説集を一冊出しています。79年から81年まで出しています。82年と今年（83年）のは年末の予定です。我が国の出版に関する資金のやりくりは緩慢なので、現在のところ3冊だけ出ています。

Q 農民を書く理由は何ですか。

A 私は農村にいたので、一番よく知っているのは農民のことです。文学創作に携わる者には生活がなければなりません。私は農民をよく知っているから農民を書くのです。私と農民との間には共有する感情があります。彼らと長年一緒に暮してきて、彼らの生活、喜怒哀楽は基本的には私と同じであり、関心を寄せる事柄も同じです。

私たちの中国には8億の農民がおり、彼らの生活に最も注意を払わねばなりません。四人組が失脚してから、党中央が最も関心を寄せているのは農村経済及び農村の問題です。第一に掌握しなければならないのが農村問題なのです。農村問題をしくじると大変なことになります。我が国の最大の特徴の一つは8億もの農民がいることです。これは陳雲同志の言葉です。農民自身だけでなく、都市のインテリ・幹部・労働者も農民から相当影響を受けますし、また逆に農民自身にも、インテリ・幹部・労働者の影響がみられます。これは労働者と農民の関係が最も密接だからです。

文学における典型的人物は往々にして農民で

す。幹部や労働者などからは典型人物を作り出せないようです。魯迅は阿Qという典型的人物を書きました。中国文学の創作伝統も主として農村を書くことで典型的人物を書いてきました。

中国の文学者は農民を描く経験は割合に豊富ですが、都市を描くことは少ないようです。例えば、労働者を書こうとすると、経験不足で書けません。文学作品をその題材によって、農村もの、都会ものなどと分けてしまうのは、それ自体あまり科学的ではありません。実のところ、文学には社会的文学があるだけであり、農村と都市の区別など本来ないのです。社会は一つの整合体であって、文学は社会生活を反映したもののなのです。

現在の農村生活は魅力があるとはいえず、単調そのものです。しかし、田舎の生活を理解すれば、農村にも変化が訪れていることが分かります。特にここ数年、生産責任制が導入されてからは、とても活気に溢れています。蘇南地方を例にとると、農民の思想は以前より随分複雑になりました。まず第一に経済機構が複雑になりました。農民は皆、老いも若きも自分のことは自分ですようになりました。どの農民も社会活動の範囲が広くなり、農民の思想も複雑になりました。その他に、各方面の能力も高くなりました。このように変わってきている農民は、国家にとっても社会にとっても有益です。

Q 阿Qという農民典型についてはどのように考えていますか。

A 1930年代は西欧文学の影響を受けて農民や、労働者を描いた作品が表われましたが、それ以前は働くものを書いた作品はとても少なかったのです。阿Qはその一つです。

Q 農民のもつ政治、社会的影響力については？

A 基礎は農民です。今日ではいくらか変化がありますが、農民に対する教育に注意を払わないと、ある側面だけが突出してしまいます。毛主

席はこう言っています。「重大な問題は農民を教育するということである」と。習慣の力が一番恐ろしいのです。農民には良い所もたくさんありますが、同時に悪い所もあります。歴史は王朝交替を繰り返すけれども、思想や意識は王朝交替のようにそう簡単には変らず、農民自身の中に長い間残っているものです。しかし、思想は一つずつばらばらのものではなく、一つに混ざり合ったものなのです。

中国の農民は確かに勤勉で、忍耐強い。たたかなくても倒れないし、飢えて死に絶えることもないのです。家に一斤の米しかなければ、今日は半斤だけ食べ、明日半斤しか残らなければ、二両でも我慢するのです。農民は弱者には特に同情しますが、強い者にはあまり同情しません。落ちぶれていれば同情してくれますが、得意になっている時には離れていってしまいます。たとえ農民に親切にしても同じことです。例えば、魯迅の小説「故郷」の主人公は閩土の父親にやさしくするのですが、彼はどんどん離れていってしまいました。しかし、うまくいかなかった場合には、農民は同情してくれ、服を着せ、ご飯を食べさせてくれるかもしれません。

Q 大躍進、集団化政策以来、農民は大きな忍耐力を示してきましたね。

A これは農民の弱点ともいえます。

Q 農民は集団化を嫌ったのですか。

A 集団化はある一定の条件の下で発展しました。そして、文化大革命までいってしまいました。いまは生産隊が集団として生産を請け負うことはよくないと農民は皆考えています。実際には、条件は相対的なもので、例えば幹部、つまり指導者のレベルや技術水準が高く、公社員の自覚が高いところであれば、集団化が悪いとは一概に言えません。大事なものは、大部分がこれらの条件を欠いていたということです。

Q つまり集団化は失敗したということですか。

A 成功しなかったと言ったものではありません。我々自身がうまくやれなかったのです。もし、我々が小国だとすれば、10万もの生産隊などなくても、千から5千でも十分それなりにやれたかも知れない。勿論すべての生産隊が悪かったのではないし、そんな風に見ることはできない。適切な条件さえ備わっていれば、集団化はうまくやれます。

現在我々は生産責任制を行っており、将来は「聯営」（連合経営）を行うつもりです。農民自身で「聯営」できるようになるのです。無論それにはいくつかの条件が必要です。一つは、指導者がいなければならないということです。この指導者は皆から信頼されていなければなりません。まずこの条件が揃えば農民自身が組織をつくり始めることができるのです。組織的条件と経済的条件、それにある程度の民主があれば、農民は指導者についていきます。このようにすれば、うまくいくでしょう。これは実行可能です。これからの集団化——現在行っているのも集団化ですが——は生産請負を用いる方法です。これまでは生産隊が請負う方法でしたが、今は社員が請け負う方法を採用しており、経営方法が違ってきています。

Q では農業集団化はやはり必要だと思うのですか。

A 我々の集団化はどのように組織されてきたのかということですが、初めはとても順調でした。自ら望んで組織し始めたからです。一つ例を挙げましょう。最初は経済支出に関して一つ規定がありました。つまり集団の支出について、10元以下であれば合作社委員が自分で決めることができましたし、ところによっては10元から50元の間でも委員が自分で決めることができました。しかし、50元以上の支出については社員大会で決定されなければならなかったのです。この問題はとても重要です。つまり、当時は民主的で幹

部の権力は小さく、後のように巨大で集中してはいませんでした。社員はすべて生産隊の金がどのように使われるのか、またどのように使ったらよいのかを知っていました。しかし次第にだめになってしまったのです。50元といわず、百元、千元といえども社員は与り知らぬことであり、委員会が自分で決めて使えばそれまでのです。農民は忍耐すればよいと考え、支出のことなど考えようとはしなくなり、権力は幹部に集中しやすくなってしまいました。

工場は違います。工場はこれよりも少しましです。労働者はよく意見を言いますが、農民はあまり意見を言うことはしません。そのため幹部はたやすく権力を握ってしまい、あのような状態になってしまったのです。

Q なぜ幹部がそんなに簡単に腐敗してしまったのですか。

A 責任は極左路線にあります。50年代末に大躍進が始まりました。大躍進が農村にもたらした破壊は巨大なものでした。大躍進は経済面での具体的政策ではなく、政治的な政策だったのです。たとえば土法高炉（民間の製鉄運動）などは見ただけで農村と無関係であることが分かるのに、強行して農村経済に多大な損害を与えたのです。

Q 人民公社に問題はなかったのですか。

A 高級合作社への発展は速すぎました。元来の計画ならば、農民の自発的参加を原則に順を追って初級から高級へと発展していくはずであったのに、後に政策が変更されてスピードが速まったのです。そして高級合作社はすぐに人民公社へと変わっていきました。

高級合作社が人民公社へと変化する頃には、農民は全く他人任せで何が何だか分からなくなっていました。既に大枠は固められており、どのような決定もすべて幹部が行い、大衆の意見など聞かなくなっていました。

Q それでも農民は忍耐したんですね。

A 農民の忍耐については、まず農民の経済的基礎、旧社会で農民がどんな生活を送ってきたか、現在ではどのような生活を送っているかということを理解しなければなりません。比べてみれば、50年代から76年までの間に、農民の生活はやはりよくなってきています。この点は、はっきりと理解しておく必要があります。だから農民は忍耐できたのですし、農民はそれを忍耐だとはちっとも思っていないのです。しかし現在農民の生活は非常に豊かになり、文化大革命や大躍進当時のような生活をもう一度やれといっても、もはや我慢できません。農民はこれまで苦しんできたので、昔に比べれば今はよいと思っているのですが、農民がこれからも忍耐していくのかどうかは、とてもむずかしい問題です。

Q 文革期はどうでしたか。

A 当時、農民が最も不満だったのは、自分で作って自分でもうけて、さらにたくさんの物を作るということが禁止されたことでした。その頃の最大の不満はこの点でした。何か自分で作ろうものなら、“資本主義のシッポ”と言われて禁止されました。

Q 文革以後は？

A 農民は数ムーの土地を耕作します。これまでの政策では生産量を多くしても収入はいくらもふえなかったのに、今ではふえた分だけ自分のものになります。ふえた分は、食物が欲しければ食物でいいし、銭だったら銭でいいのです。これが第一点。第二点は、以前は生産の現場で幹部がでたらめな指揮をとったり、農民も“親方日の丸”で積極的でなかった。現在の責任制は、社員の積極性を引き出すものです。

Q 農民はやはり自分の土地が欲しいのですか。

A 以前は生産向上をおろそかにしすぎ、責任制をとらなかったのです。現在の農民、特に蘇南のような地区の農民は、土地に愛着を持つとい

うことはなく、それほど土地に執着していません。調べれば分かりますが、農業専業で富裕な農民は一人もなく、大体は副業に頼っています。

国家の要求に基づいて、去年（82年）の省・市・自治区農業書記会議の席上で万里（副総理）が言ったことは、今はどの社員にも土地があり、将来は専業に従事できるようになるということです。魚の養殖や養蜂を専門にやるのと同じように、将来は、耕作専門の農民もいるようになるのです。生産隊の土地は数人の農民に請け負わせて耕すこともできます。しかし、今のところはまだ実行できません。魚の養殖と養蜂しても自分の土地は自分で耕さねばいけません。

Q つまり「耕者有其田」ではないのですね。

A それは、当時発表された、反封建のスローガ

ンです。今では農民の考えも変わりました。特に工業の発達している地区ではそうです。工業が発達すればするほど、思想も大きく変わります。

Q 白樺批判以後、『時代的報告』誌の編集部が改組されましたが……。

A 黄鋼辞職については何も知りません。組織替えの後は田流になりました。黄鋼は異動したのです。彼はもともと国際政治学院の人間です。中国文学の主流は現実主義で、この点では皆が一致しています。一つ問題なのは、現実に対してどのような見方をするのかで、様々な方法があっているのではないのでしょうか。この問題でよく論争が起きますが、論争はいかなる場合でも起こり得るし、継続していくものなのです。

【紹介】経済研究会1983年度活動状況

82年度（16回）にひきつづき、83年度も17回と活発に行われた。中国の経済情勢を反映して、農業生産責任制、経済改革に特に関心が集った。1カ月に2回開かれた月も多く、所外からも多くの研究者に報告をしていただいた。座長の山内一男・阪本楠彦両所員の御尽力を多としたい。

① 4月18日「中国文学からみた経済実態」（辻康吾）「変革期の新矛盾——羅来勇『世界在他們眼前展開』について」（青谷政明）

② 4月25日「最近の農業責任制の実態」（鄭勵志）

③ 5月9日「農村の集団経済と家族経営」（菅沼正久）

④ 5月15日「生産責任制下の農民層の分化」（阪本楠彦）「中国における個別経営農業の再登場について」（浜 勝彦）

⑤ 5月23日「中国の社会事情——雇用問題を中心に」（毛里和子）

⑥ 6月6日「中央党学校との理論的交流」（菊地昌典）

⑦ 6月27日「中国の人口問題」（島村史郎）

⑧ 7月18日「調整派と改革派の対立」（聞十郎）

⑨ 8月22日「第6次5カ年計画の研究」（第1回）（齊藤節夫・田島俊雄・白鳥富美子）

⑩ 8月29日『社会主義下甦る家族経営』合評会（中兼和津次ほか）

⑪ 9月13日「第6次5カ年計画の研究」（第2回）（山内一男・浜勝彦・木崎翠）

⑫ 9月19日「黒龍江省三江平原開発と生産責任制の現状」（稲垣 清）

⑬ 10月17日「アンドロポフ政権下における経済改革の動向」（袴田茂樹）

⑭ 11月7日「農業機械化代表団顧問として旅して」（阪本楠彦）

⑮ 12月5日「生産責任制と農工商連合を視察して——四川省を中心に」（大島 清）

⑯ 12月19日「中国の開放政策の現状——経済特区を中心として」（西川 潤）

⑰ 2月27日「ハンガリーの経済改革とコールナイの理論」（盛田常夫）